

② 横浜に住むアジアの人びと

国際交流研究グループ

横浜に住む外国籍の人は一九八二年二月現在、二一、一四二人である。そのうち、アジアの国の人は一九カ国、一八、二一七人に及び、そのうちの九五%、一七、四二〇人が中国、朝鮮、韓国籍の人である。朝鮮・韓国、中国、フィリピン、インド、タイ、シンガポール、インドネシア、ベトナムの順に多く、これらの国の人だけで一八、〇二九人で、在浜のアジア国籍者の九九%を占めている。

区別では中区Ⅱ五、〇二五人、鶴見区Ⅱ二、四二九人、南区Ⅱ一、五〇六人、港北区Ⅱ一、二七八人の順となっている（アジア国籍の人）。

市内には、これら外国籍の人たちのための団体や施設が数多くある。

代表的なものをいくつかあげると、まず山手の一角にある社団法人「ヨコハマ・カンリー・アンド・アスレティック・クラブ（YCAC）」がある。これは在浜外国人のためのスポーツ施設として親しまれ、約九千坪の土地に、運動場、プール、テニスコートなどが設備されてい

る。会員は三〇カ国、七二八人で、そのうちアジアの人は約一割である。その百年に及ぶ歴史は横浜の歴史を深く刻み込んでいる。

ヨコハマ・インターナショナル・ウィミズクラブ（YIWC）も、一九二九年（昭和四年）に設立された歴史のあるクラブである。会員は二五カ国、約四百人で、半分が日本人。外国人のうちのアジア人は一割ほどだが、欧米国籍のアジア系の人を含めると約半数になる。会員相互の生活交流と共に、県内の福祉施設への支援を積極的にやっている。

またヨコハマ・アマチュア・ドラマティッククラブ（YADC）は約四〇人の会員（アジア系一割）で、月一回の演劇を市内で上演しており、連日のように仕事のととの練習に努めている。

これ以外に、教会別の集會、国籍別の集會や団体が数多くあり、とりわけ、在浜中国籍者の横浜華僑總會や、在浜朝鮮籍者の在日本朝鮮人總連合會、在浜韓籍者の在日本大韓民國居留民団が、組織

・会員数が大きく、住民の福祉向上と地域の相互理解促進のために努力している。

横浜には長期間生活する外国人ばかりでなく、学術や技術の勉強のために比較的短期間滞在する留学生や研修生も数多い。そのため施設がいくつもある。

磯子区汐見台の「財団法人海外技術者研修協会横浜研修センター」は、日本の企業で研修を受ける外国人に主に日本語を教える施設で、常時約六〇〜一〇〇人の研修生が三カ月から半年滞在、一年間に約三百人がここを経ている。そのうち六〜七割ほどがアジアの人である。

造船の技術研修のための研修所に、南区日野の社団法人造船技術協力本部があり、一五人の研修生が二年間滞在中。

大学への留学生のための施設には、南区弘明寺の横浜国立大学留学生會館、緑区梅が丘の東京工業大学留学生會館などがある。横浜国大の會館には同大学生だけでなく、東京周辺の国立大学生が住み、一五〇室に三〇カ国、一八〇人余り

の留学生がいる。東京工大の會館は約七〇人収容、一年留学。

これらの研修所、留学生會館の研修生や留学生はアジア諸国からの人が大半で、近年は中国の学生が増えている。こうした研修生や留学生のために、各施設のまわりには地域住民による親交団体が多くある。各施設の事務局でも、地域住民や市民団体の交流に対して積極的に支援し、学生たちの日本への理解促進と相互理解増進に配慮を加えている。さらに、例えば横浜研修センターの年末年始のパーティーや、東工大留学生會館のスピーチ・コンテストなどのような交流機会を設けているところもある。それでも、学生たちの日本理解の意欲を十分満たせず、多くの施設がホーム・ビジットやホーム・ステイを引き受ける日本人ボランティアを求めているのが現状である。

そのほか、港を中心に発展した歴史をもつ横浜には、船員でやってくるアジアの人たちのための憩の場として、山下町のミッシュン・トウ・シーメンズ、本牧

のユニテッド・シーメンズ・サービズなどのシーメンズ・クラブがある。これらのクラブは、日本人にも喫茶・レストランとして開放されているので、機会があったら訪れてみるのもよいであろう。

それでは、在浜のアジアの外国人は、横浜をどう見ているのか、また日本人との交流についてはどうかなどを、何人かの人にインタビューしてみた。

N・ナドソン マレーシア 二六歳

私は昭和五十六年六月に神奈川県国際交流の研修生として、マレーシアのジョホールバルから横浜にきました。現在、障害教育の研修をしています。昭和五十七年三月に両親のもとに帰ります。

私はインド系でヒンドウ教徒です。祖父は現在、日本で日本語の起源論争で耳目を集めているタミール地方からマレーシアにきました。両親は第二次世界大戦中の辛い経験から、日本に対し、あまり良い気持ちを持っていません。でも、私にはその戦争は遠い昔のことのように思えます。また、日本の人々は職場でも、道を聞く場合でも、親切に教えてくださいます。

食事は自炊が主ですが、外食もしています。ご存じのことと思いますが、ヒンドウ教は牛肉に対し食物規制があります

ので、外食の際は神経を使います。その事情のみこめていない人には奇異に感じるかもしれません。

日本で初めてのことをいろいろ経験しました。例えば、日本のお風呂です。私は大人数ではない風呂は生まれて初めてで、最初は入ることができず泣いていました。二つめは雪が降ったとき、同室の人と外に出て、二人ではしゃぎ、記念撮影をしました。三つめは通勤ラッシュで一般的にマレーシアは住居と職場の距離が短かいので、通勤にあんなに苦労することはありません。本当に恐かったです。

これらの経験は、きつとよい思い出として残ると思います。

クウェ・リヘン (郭麗杏)

シンガポール 三二歳

私は昭和五十六年六月に、神奈川県国際交流研修生として、シンガポールから幼児教育の研修のためにきました。現在、根岸にある国際協力事業団の海外移住センターに滞在しています。三月に夫と子の待つ故国に帰ります。

横浜で日本の正月を経験しました。正月の間、海外移住センターが閉館するので、荷物を持って、同室のナドソンさんとともに、仲間の留学生の寮や県交流

委員会の方の家に泊めていただきまし、そこで、日本の正月料理を初めて食べました。日本のおモチは食べるのに苦勞しました。なかでも磯部巻は苦手で、やはりおモチはピーナッツを砕いて粉にしたものと砂糖を混ぜたものをまぶして食べる方が合っていると思います。

横浜では日本の方と同様な通勤を経験しています。日本のラッシュに慣れず、何台も電車に乗れず、また、途中の駅で押し出されてしまったこともあります。

シンガポールも似たようなものですが、主にバスのそれです。でも、時差通勤やフレックスタイムによって、少しでも混雑を緩和しようと努力しています。

私は社会福祉団体のコミュニティ・センター(人民協会)に所属しています。

日本には類似なものはないようですが、シンガポールのそれは三〇〇のセンターを持つ大組織です。それは午後二時三〇分から午後十時三〇分までの八時間開いており、六百円程度の利用料で、少年から老人まで、運動施設、図書室、コンピュータ教室、チェスなどを利用することができ、政府から補助金を受けることができます。政府から補助金を受けることは独立しており、多くのボランティアによって運営されています。センターの目的は白地に赤い輪が四つ重なるシンボル・マークに象徴されています。つまり、四つの赤い輪は四つの民族を表わし

ます。華人、マレー人、インド人、その他です。輪が重なるのは連帯を意味します。シンガポールが発展するためには連帯が大切だからです。

ファン・クーチュン (範可君)

中国 二二歳

私は昭和五十六年四月から昭和六十年三月まで横浜国大で安全工学を学ぶために来浜しました。出身は杭州市で、浙江大学の土木に入学し留学のために吉林師範大学の中国留学生赴日予備学校で約一年間、日本語を学びました。

現在、寮と大学との間の往復で毎日を通っています。京急と相鉄を乗り継いで登校します。浙江大学の一年の教養科目は七科目ですが、国大の教養科目は種類が多い上に二七科目も受講しているの、朝の八時ごろにはラッシュの電車で乗らねばなりません。杭州にもラッシュはあります。それは日本と違い、主に自転車やバスですが、それに慣れてい、横濱のは楽に感じます。

授業にはまじめに出席しています。日本の学生が授業を故意に欠席することをみるにつけ、中国では、そういうことがありませんから、不思議に思います。それはきつと先生の講義法にもよると思うのですが、日本の学生はよほど自信があ

るのだからと思ってしまう。

食事は自炊していますが、昼は学生食堂でとりま。皆がのんびりと食事しているのが大変違うように目に映ります。というのは、浙江大学の学生食堂では皆、立食するので、あわたたしくなってしまうからです。

たまに、勉強に疲れると横浜の中華街へ行き、街の民族的な雰囲気味わいます。杭州の夜には、ネオンサインがありませんので、横浜の夜の数多くのネオンサインには、驚きました。でも杭州は横浜のように午後七〜八時になると人の往来がなくなってさびしくなるようなことはなく、真夜中でも勤務の関係で人の往来は多く賑やかです。

大学の専門は安全工学ですが、日本では専門書の値段が中国のそれと比べるとかなり高いと思います。でも、中国で一般書を買おうとすると日本人から見ると安く感じられるらしいけれども、私達の場合は高く感じられます。そのかわりに中国では図書館が横浜にある県立図書館や大学図書館よりも整備されています。

横浜での友人は主に同級生や中日友好協会の人達です。それ以外の友人とはまだですが、チャンスがあれば、近所に日本のことを何でも聞ける友人をつくりたいと思っています。

日本のことや横浜のことは中国において最近だんだん知られるようになってきました。「砂の器」や「野麦峠」という日本映画がヒットしましたが、残念ながら、大学受験のための勉強で見ることができませんでした。都市では日本語を学ぶことが盛んです。私は専門の学問を学び、そして日本のことをもっと知りたいと思っています。

ユスフ・シアハヤ

インドネシア 三六歳

私は南セレベス島のウェンバンダン大学の助教授で、日本に来て三年になりました。二年間大阪外大で日本語を勉強したあと、横浜国大で機械について勉強しています。

インドネシアには日本と同様に受験競争があります。ただし浪人はいません。義務教育は小学校六年間だけで、その上に中学・高校・大学があります。大学は入るのが大変で、特に国立大学は全国で四〇校ほどしかないので競争が激しく、私の大学でも競争率が一〇倍を越えます。

勉強のために欧米へ留学する人もかなりいますが、中でもドイツへ行く人が最も多いようです。

ジャカルタはインドネシアでも特に人

口が集中し人口問題となっていることもあって、始業・終業時のラッシュはひどいものです。私の町ではオートバイが多く使われています。

日常生活では、生鮮食料の物価が安いので暮らしやすい所です。また土地が広いので住宅には問題がありません。仕事以外では映画やバドミントン・テニスなどを楽しんだり、休日にはビクニックに出かけます。海外旅行をする人もいますが、シンガポールや香港へショッピングをしに行く人が多く、日本へはあまり来ません。

日本のことについては小学校の時から学ぶので、みんな知っています。でも第二次世界大戦を経験している人は、日本の侵略の苦い記憶もあってよい印象を持っていません。

実際日本に来てみると、家が小さいこととすべてが忙しいことには驚きました。また東京は公害がひどく、横浜のほうがいい町です。

私の行動範囲は大学が主で、一人で買い物に出かけると不便です。友人も研究室の仲間だけで、二〇人ぐらいです。一般の日本人の友人はほとんどいません。

日本人は親身な付き合いをしてくれないというのが日本人に対する印象です。ただ日本には専門分野の研究機関があり、むこうではできない勉強ができたので、

日本に留学できてよかったと思っ

フェン・ユウリン(馮玉伶)

台湾 二四歳

私は横浜国立大学で美術を専攻している二四歳の学生です。台湾では小学校の教師をしていました。留学の動機は、日本は文化や技術その他いろいろな面で進んでいるし私の国からも近く、興味を感じたからです。それに両親も千葉で伯父の経営する中華料理店で働いています。

日本に来て三年になりますが、最初の一年間は四ツ谷の日本語学校に通いました。今ではほとんど不自由なく日本語を話せます。しかし読むほうは普通の日本人の三倍から四倍ぐらい時間がかかりますので、専門書を読むのたいへん苦勞しています。

朝六時に起き、食パンと牛乳で朝食をすませて大学へ行き、夕方七時頃帰宅します。夕食はスーパーで買物しほとんど自炊です。食費は一月三万円ぐらい、生活費は七万円なので、ぜいたくはできません。勉強に忙しくないときはテレビを見ます。ドラマ、ニュース、クイズ番組なんでも見ますが、とくに演歌は中国のメロデーと似ているので親しみがあります。前川清、五木ひろし、山本譲二

は大好きです。日曜日は掃除や洗濯それに宿題等で終ってしまいます。

日本人の友達は何、三人います。同じクラスの学生です。勉強やそのほかいろんなことを聞いているうちに親しくなりました。私よりも歳下なので妹や弟のような感じがします。私はもっとたくさん日本人と知り合いになりたいと思っています。その国の人を知ること、その国を知る一番よい方法だからです。それで、私が日本人に私の母国語である中国語を教え、そのような場を通じて友達になれたらと思っています。

パク・ポツン(朴福順) 朝鮮 四三歳

三歳の時に日本へ来て、福井、山口へと移動し、五年前に夫婦で横浜へ来ました。でもそのとき一番困ったのは住む家が見つからないことでした。不動産屋に頼んでおくと、家はみつかるのですが、それは通名(日本名)で頼んでおくからで、こちらが朝鮮人だとわかると断わられてしまいました。東京でも同じことがありましたし、白楽でも同じ体験をしました。そこで、今までもそうであったように、同胞が集まっている所に住むことにし、現在地に移り住みました。

このあたりは、通称「朝鮮人部落」と呼ばれる所で、電気や水道がきたのも遅

く、少し前まではタクシーも来てくれませんでした。街燈にしても町内会に言ってもつけてくれません。回覧板もあまり回ってこないのです。でも、盆踊りはないことが多いのです。でも、盆踊りは、近くの小学校で行いますが、朝鮮歌舞を披露するなど仲良くやっています。

ところで私には二人の子供があり、上の子は市立保育園に入れています。私は週何回か働きに出るので、迎えに行くのが遅くなる場合があります。すると、もしかられます。

この子供達が大きくなったら、朝鮮学校へ行かせようと思います。教育費は自分達で負担するため公立学校へ行くよりもかかりますが、民族の自主性を誇り、言葉を習うにはその方がよいと思えます。

日常生活で感じたことがあります。先月主人の母親が韓国から来ました。そこでいっしょに買物に出ましたが、いつも買いに行っている店で、チマ・チゴリを着た母を見て、ヒソヒソ話をしているのが気になりました。

こうした日本人と朝鮮人との関係ですが、朝鮮人の過去や現状についてもっと理解が進んだなら、いろいろな面で違うつき合い方ができるのではないのでしょうか。先日テレビで、日本と朝鮮との関係や在日朝鮮人について放映しました

が、役所でも取り上げれば、皆さんの理解も進むと思います。

M・サイヤー パキスタン 四二歳

私は十数年前に日本へ来て、はじめは東京にいましたが、十年前から横浜に住んでいます。山手のインターナショナル・スクールで数学の教師をしています。住まいも山手で、子供も同じ学校に通っています。マンションに住んでいます。同じマンションの日本人とも交際があります。商店が離れているなど不便に感じる点も少しありますが、交通も便利で、横浜は東京よりも住みよい所です。

ただ、英語を話す外国人の間では、アジア人は少数派なので、もっとアジアの人が増えるとういと思っています。また、私は回教徒ですが、お祈りをする場所が横浜にないので、東京へ出かけなければなりません。

パキスタンではカラチに住んでいます。パキスタンは農村から都市への流入が激しく、大部分の流入人口はそのままその都市に住みつきます。とくにカラチの人口圧力は、アラブ諸国への大量の輸出を生んでいます。出稼ぎに伴う外貨の豊富な流入は都市の産業資金となり、例えば友人がプラスチック加工機械の購入を望んでいるように、先進諸国の工

業技術輸入の意欲を高めています。

日本との交流も深めていくべきで、さらに広く交流するため、姉妹関係のかたちでパキスタンの都市と横浜が結びついてはいかかでしょうか。港のあるカラチなど最も適当ではないでしょうか。重要なことは役人の間だけの交流でなく、広く一般の市民の間の交流が盛んになることで、その場合、日本にながく住み横浜とパキスタンのどちらもよく知っている私は、いろいろな面で協力できると思います。そういうなかで横浜に住むアジアの市民も増え、より住みよい街になっていくでしょう。

ユッタナー・ボームシリチャヨ

タイ 二六歳

私は、日本に来て約二カ月になりました。日本語はタイで一カ月くらい勉強してから、名古屋の中部研修センターで約五週間学びました。日本に来たのは、日産自動車でエンジンの組み立ての研修を受けるためです。タイでは現在、NIS SANに勤めており、帰ると検査部門に配属される予定です。

私はバンコクの郊外に住んでいます。通勤はバスで、工場まで一時間くらいかかります。今は汐見台にある研修センターから新子安まで通っていますが、タイ

と比較すると、バスは日本の方がはるかにきれいです。私の国ではラッシュ・アワーには、人はバスからはみ出し、すずなりになっていきます。しかし電車はありませんので、初めのうちはとまどい、乗りすごしたこともありました。

私の家族は、チャントブリというところでドリアンを主に作って生活しています。私は七年間の小学校、三年間の中学校、二年間の高校のあと、専門学校で五年間、生産技術を学びました。公用語はタイ語ですが、英語は小学校五年から教えられましたので、話せます。

バンコクでいま問題になっているのは、なんといっても大気や水質の汚染です。バンコクはベニスのように運河が多いところなので、その汚濁が問題にされています。また、交通混雑がひどいことや、人間関係の希薄さ、それに売春の問題もあると思います。私は庭いじりが好きなので、バンコクは好きになりません。

娯楽としては、映画がポピュラーで、約一〇〇円から八〇〇円くらいです。また、テレビも四つのチャンネルがあります。

タイでは、二一才以上になると三日から三カ月の期間BUOCH・PHRA(プオ・プラ)と呼ばれる仏門に入る義務があります。私も帰国したら頭をそられる

ことになります。

私は最近、「將軍」(ジェームス・ガーベン著)を読んで感激しました。日本の「サムライ」を私は好きです。

横浜についてはまだ横浜駅しか知りませんが、名古屋よりきたないと思います。友人は、会社の中以外には現にいないので、もっと日本人と横浜を知りたいと思います。

チョウ・ドンシユク (尊東植) 韓国

私は横浜国立大学大学院修士過程で教育学を学んでいます。住まいは横浜国大の留学生会館です。二年前に来日し、この三月で帰国します。

二年間日本に住んでみて、日常生活全般については、過去の文化伝承が似たようなものであったためか、殆んど違和感がありません。しかし細かい点ではかなりの違いがあります。例えば日本人は刺身にしよう油を使っていますが韓国では味噌を用いるので、いささか味覚に戸惑いを感じました。韓国の添え物はカラライのが普通ですが、日本にもワサビのような日本独自のカラライものがあるのを知りました。また、韓国では暖房は床面の暖房配管によるものが多く、日本式よりはやく暖かくくなります。その点、日本の暖房方式は不便を感じます。韓国式のほ

うが活動しやすいので、韓国式をぜひ推薦したいです。韓国と日本の社会習慣にはタイムラグを感じさせる面があります。韓国では結婚の多くが見合いで、今でも六割以上に及びます。女性の職業が限られていて、男女間の交際機会が少ないうえ、家族主義が根強い韓国社会の風潮に基づいていると考えられ、日本とのちがいを感ずります。

日本の大学で学び、日本語を修得して、本国で日本語の教師になりたいと思っています。日本に住んでいて、実際の範囲は親戚と大学の友人ぐらいです。横浜市内へ遊びに出かけることもあまりありません。多くの人と知り合う機会はできるだけ多く持ちたいと思っていますが、お互いの立場や語学力、それにきっかけが大事なので、簡単にはいかないかもしれません。

ヨシ・カリアティ・ハリム 三〇歳
エルリン・ジョン 二八歳

インドネシア

私たちはインドネシア、ジャワ島のスラバヤ市(人口一五〇万人)の出身で、私(ヨシ)は高校を卒業してから三年間働いて学費を貯め、八年前に来日しました(エルリンは高卒後すぐ来日)。インドネシアにいたときに結婚し、現在一才

の子供がいます。(インドネシアの場合、学部生は私費で、大学院生から国費の留学生になります。夫婦の場合は一人が国費でもう一人は私費になります)。

初め大阪で一年間日本語を学んだ後、横浜国立大学へ入学しました。私(ヨシ)は国大の修士課程を終え、この四月から東大大学院の博士課程へ進みます。専攻は建築学です。私(エルリン)は国大の修士課程で建築意匠と都市計画を学んでいます。

インドネシアから留学する先は欧米が多く、日本へは少いのです。欧米の場合には語学のハンディがないので、すぐ大学へ入れますが、日本の場合、日本語を修得するのに一年間のロスがあるからです。それでも私たちが日本へ留学したのは、私(ヨシ)の祖父が戦前に日本の銀行に勤めていたことがあり、よく日本の語を聞いていましたので、日本の習慣や風俗に魅力を感じていたからです。また、第二次大戦中の日本軍政下での日本人の厳しさについて聞いていました。例えばスリを捕えたときに指を切り落してしまったとか。そのことはたしかに乱暴ではあるが、善悪を厳しく峻別する考え方は私たちに理解しうるものだと思います。映画の中の侍たちもそうでした。その背景には、善悪を厳しく峻別する教育が存在するに違いないと思っていました。

でも日本へ来てみると、ずいぶん違うことに気がきました。侍はどこにもいなかったし、若者が乗物の中で老人に席を譲らないこと、若い男女が簡単に同棲してしまうことなどを見るにつけ聞くにつけ、日本人は物は豊かになったが心の豊かさを失っているのではないかと思うのです。

一年前にいま住んでいる横浜国大の留学生会館にきました。それ以前は井土が谷の民間アパートに五年間いました。顔の形や肌の色が同じで日本語も話せるので、断られるようなことはありませんでした。同じ留学生でもスーダンから来たネグロイドの人は断られたというケースもあります。私たちの大家さんは良い方だったので五年間住み、その間、家賃は据置きでした。同じアパートの人とも仲よくしていましたが、すぐに引越してしまるのが残念でした。

日本の家はインドネシアのと比べると部屋が狭いので、一日中家の中にいると息苦しくなります。インドネシアでは各

部屋にカギがかかり、寢室が自分の世界で、そこを一步でも出れば家族同士でもキッチンとした服装をしています。日本では玄関から中が混然一体となっている感じを覚えます。

いま住んでいる弘明寺は庶民的で活気があり、住みやすい所です。横浜は東京と比べると何かに追われるようなところがなく、暮らしよいです。ただいったん横浜駅へ出なければならぬ鉄道網は不便です。それに駅名や道路の名称などが横文字で示してある所が少いのも、日本語の説めない外国人には不便です。また、港周辺や臨海部だけでなく、郊外のほうにも文化施設などがほしいように思います。

最近は大通り公園や大岡川プロムナードなども出来てきていますが、全般に横浜の道は、どれもみな同じような感じで特色がありません。家々の外形は立派ですが、一つの集まりとしては統一性を欠いています。インドネシアの在来の都市では、大きな道路に直角になっている狭

い横道の両側がカンボンという一つのまとまりをつくっています。道の両側に家の密集した所が多いのですが、道が狭いので車が入らないから子供たちが遊んだりする生活空間にもなっています。家の色もカンボンごとに相談して決めます。

各家の色はちがっても全体として統一がとれるようにするので。自分たちで相談して決めたことだから誇りをもち、カンボンごとに特色を出そうとします。カンボンに置くゴミ箱を次はどんなものにするか相談して決め、足りなければ市に申し込むということもあります。カンボンには消防車が入れないという防災上の問題や衛生状態がよくないなどの問題もあり、政府は側溝や歩道をつくるなどの改善策をすすめています。

日本人の知り合いは大学の友人や専門関係の人たちです。インドネシア人は気が合わなければ最初からつき合いませんが、日本人は誰とでも初めはつき合う代りに、ある程度から先は入り込めない壁があるように感じます。

インドネシア人と日本人の交流を深めるには、スポーツ交流や芸能交流など、市民レベルの交流を盛んにすることが大切だと思います。姉妹都市関係を結ぶのもよい方法でしょう。

あと三年間日本で勉強し、故国へ帰ったら大学で教えたいと考えています。

このインタービュは、総務局職員研修所の自主研修事業に応募した「国際交流研究会」の会員のうち都合のつく者と、会員以外で参加した者として行った。氏名は次のとおり。

- ▽国際交流研究会員 石川孝樹(経済局国際交流課)・加藤勝彦(都市科学研究室)・川崎圭子(衛生局港湾病院庶務課)
- 中村豊仁朗(道路局建設課)・長谷川隆(同局緑土木事務所)・前田清隆(企画調整局横浜国際会議準備担当)・牧野孝男(総務局労務課)
- ▽会員以外 石原郁子(総務局秘書課)
- ・稲垣晴彦(同局同課)